

Title	禪と痴漢
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日本語・日本文化. 44 P.73-P.84
Issue Date	2017-03-31
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/60418
DOI	10.18910/60418
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究ノート>

禪と痴漢

岩井 茂樹

はじめに

枯山水庭園などに代表されるような枯淡なイメージを持つ「禪」と、毎日のように報道される「痴漢」という存在に、重なる部分を見出すことは、現代に生きる我々にとって非常に困難な作業である。重なりが見出しにくいだけでなく、ある意味でこの二語はまったく対極にある言葉と言えるのかもしれない。基本的に色の世界を否定するのが「禪」であり、色の世界に溺れてしまうのが「痴漢」であるからだ。だがある時期まで、この二語の間には深い関係があった。とりわけ禪宗が独自の発達を遂げた日本にとって、「痴漢」は大切な言葉であった。

これまでの拙稿によって、「痴漢」はもともと、「愚かな男」を意味する口語の罵倒語であり、それが主に『水滸伝』などの「白話小説」や、「禪語録」などの禪宗関係資料によって日本へと流入したことを明らかにした¹。しかしながら、そこでは「白話小説」の影響を重視し、拘泥するあまり、もう一つの流入経路である「禪語録」などの禪宗関係資料に関する考察がおろそかになってしまった。特に禪宗は何度かに分けて日本に流入し、そのたびに大量の書物が請来されてきた。その移入は「白話小説」よりもはるかに早いため、「痴漢」という語彙がこうした書物によって先に使用されていた可能性がきわめて高い。さらに言えば、他の大乘仏教、つまり密教系や浄土教系などの資料には「痴漢」という言葉が見えないという事実もある。これはいったいどういうことだろう。

本稿はこうした不足点を補おうとする試みである。主に禪宗関係資料に登場する「痴漢」という語を考察対象とするものであり、これを加えた上で「痴漢」という語彙の流入経緯と時期を再考し、おおまかな全体像を提示することを目的と

する。

ちなみに、本稿では読みやすさを考慮し、特に断りのない限り、引用部の漢字を通用のものに改めたことをあらかじめ断っておく。

第1章：禪宗での用例

禪宗関係資料における用例を表1として示した。表1に示した用例の一部は、中国における「痴漢」の用例として前稿にも記したが、本稿にも再録しておく。というのも、再録したものはいずれも『大正新脩大藏經』に記載されているものであるからだ。つまり、中にはもとは中国で作られた書物も当然存在するわけだが、伝来時期はわからないものの、日本へ伝来していたことが確実視される書物もあるからである。

表の書名欄に◆が付してあるものが、日本で成立した書物である。表では、成立年または出版年が明らかなものをまず年代順に、そして不明なものは著者または編者の生年代の早いものから順に並べた。

また、表中に挙げた書物には、複数の異名を持つものがあるが、書名はすべて『大正新脩大藏經』における書名に統一し、成立と出版年については『大藏經全解説大事典』の解説に従った。

用例は、先に断った通り漢字を通用のものに改めた他、「痴漢」という語の位置がすぐに判別できるよう、太字にした。

表1：禪宗関係資料における「痴漢」の用例一覧

資料 No.	書名	成立 出版年 (西暦年)	用例
1	景德伝灯録	1004 成立	耽源曰。咄。 痴漢 誰在井中。 此は無明 痴漢 。煩惱即是菩提。
2	楊岐方会和尚語録	1052 序 1088 題	更問如何。也是 痴漢 上堂。

3	法演禪師語錄	1098 成立	迹絶無香氣上堂云。六祖能大師。是箇大痴漢後代兒孫多。展轉生惑乱。子細好思量。白雲不著便上堂。
			上堂云。举則公案。事事成弁。向外馳求。痴漢痴漢
4	宏智禪師広録	1157 自序	僧云。恁麼則遷去也。師云。痴漢著甚死急。
5	大慧普覺禪師語錄	1172 刊	然後下合頭語。以爲奇特。痴漢。
6	密菴和尚語錄	1188 序	千人万人。羅籠不住。正是十字街頭。痴漢見解。
7	◆仏光国師語錄	13C 成立	難与痴漢説。点眼知廬陵米価。早是鈍漢也。
8	仏果園悟禪師碧巖録	1300 刊	耽源曰。咄。痴漢。誰在井中。
9	資行鈔	1344-49 成立	愚痴漢語也。
10	◆常光国師行状	1412 成立	故云歇即菩提。至如長慶間坐。却是痴漢耳。
11	◆常光国師語錄	15C 成立	故云。歇即菩提。至如長慶間坐。却是痴漢耳。
12	◆器之禪師塔銘	1506-1509 成立	痴漢白鳩。入室誓死。出所去來。奇祥異瑞。
13	袁州仰山慧寂禪師語錄	1630 成立 1665 刊	耽源云。咄。痴漢。誰在井中。
14	◆東林語錄	1697-1710 成立	重示成道曰。奇哉。一切衆生与我同時成道。争奈。後來有般痴漢不信如來本根。
15	◆建康普説	1765 自序・刊	則舉衆毀謗之謂無道心無信心。癡漢欲免毀謗。
			或説。某国某寺結制打撃甚強。而警策折也幾乎数十枚。行脚痴漢遁説諸方以爲叢席繁興之夸輝。
16	◆宗門葛藤集	18C 成立	仰山举示耽源。如何出得井中人。源云。咄痴漢。誰在井中。

17	◆東福第十世勅賜仏印 禅師直翁和尚塔銘	不詳	国師云。這痴漢参堂去。維那 便送被位。
18	◆松嶺秀禅師行状	不詳	又謂曰。慈明不打一单椽。用 破家散宅之手段。起臨濟将仆。 今時雄壯殿宇。華麗房欄。累 石植樹。以謂建隆法幢。這般 痴漢者。觀之如惡疾。若有毫 髮建隆之念。萌於心膂。早須 捨去矣。

表1からいくつかのことがわかる。

まず、ここに挙げた禅宗関係の資料は、その書名から大きく四つに分けることができる。禅史、禅僧語録、公案集、塔銘の四種である。たとえば、資料1の『景德伝灯録』は北宋時代に永安道原によって編纂された、いわゆる「灯史」の内の一書である。「灯史」とは広くは仏教の歴史書のことであるが、一般的には禅宗史書のことを指す。仏教という火がどのように継承され、今に至るのかを灯火を継ぐことに喩えたものである。『大蔵経全解説大事典』の該当項には、その内容について次のような説明がある。

三十卷。インドから中国に至る禅宗の法系を述べたもの。過去七仏から始まり、インドの二十七祖、中国の法眼ほうげん文益ぶんえきに至るまでの禅宗五家五十二世の事跡・語録などが集大成しており、その数千七百一人にのぼるが、単に史伝としてのみならず、語録集成の書でもあるといえる。元の名を仏祖同参集としたが、幾たびかの削訂を経た後、この名前が入蔵した。中国禅宗史の重要な資料であるが、特に唐末五代の禅の研究には欠くことのできないものである。²

この記述からわかるように、この書にはインドから中国に至るまでの禅宗の歴史が書かれている。と同時に禅の系譜に連なる仏や人物の事跡と語録が収録されている。つまり、『景德伝灯録』には歴史、事跡、語録（当然、公案も含まれる）が含まれているのである。また書名も何度か変更されている。

同様の例をもう一つ見ておこう。資料8は通常、『碧巖録』として日本でもよく知られている書物であるが、その説明には次のようなことが書かれている。

北宋代に雲門宗の雪竇重頤せつちやうじゆうけん(明覚大師)が景德伝灯録、『趙州録』『雲門録』など禅宗灯史や語録から選んだ祖師の古則などに対して、臨濟宗の圓悟克勤が(仏果禅師)が垂示・著語・評唱を付した。³

この解説からもわかるように、この書はもともと先に示した『景德伝灯録』を含む諸書に対し、異なる立場から論じた書物なのである。

つまり、書名からのみ判断した場合、まったく異なる書であるように見えるものでも、内容的に重複した部分を含むことが多いのである。簡単にいえば、一人の高僧の事跡を記したものが行状であるが、その中には高僧の語録があり、公案があり、塔銘なども含まれる。それを系譜上に位置付けたものが灯史であり、代表的な公案だけを収集したのが公案集ということになる。したがって、書名による類別にはあまり意味がないと言える。特に本稿は禅宗関係資料の分類に主眼があるわけではないので、すべての書物を必要以上に分類して論じることは避ける。

次に、各書の成立年代であるが、中国の方は11C以降に成立・刊行された書物に「痴漢」という語が見える。つまり、北宋代の書物で登場した言葉であることがわかる。一方、日本では現在のところ、13世紀に成立したとされる『仏光国師語録』がもっとも早いものである。仏光国師は諡号しごうであり、通常は無学祖元と呼ばれる。もともと明州慶元府(現在の浙江省寧波市)の出身であるが、元軍の侵攻と北条時宗の懇請により渡日し、日本に帰化した臨濟宗の高僧である。鎌倉建長寺に住し、後に円覚寺を開いた僧でもある。

表1に表れる書物の内、臨濟宗のものは資料2、3、5、6、7、8、10、11、16、17、18、曹洞宗は資料4、14、15と、数からだけ言えば、臨濟禅における用例が多いことがわかる。この理由として、臨濟宗が曹洞宗に比べ、問答、つまり公案を重視する立場にあったことがまず想起される。ただし、曹洞宗にも見られることから、どちらの影響力が強かったかをにわかに判断することはできない。

ちなみに、江戸時代後期の曹洞宗僧・良寛（号：大愚）に次のような漢詩がある。

我見一痴漢	我一痴漢を見るに
已過自立年	^{すで} 已に自立の年を過ぐ
飲酒且噉肉	酒を飲み 且つ肉を ^{くら} 喰い
椀楪未嘗乾	^{わんじょう} 椀楪 未嘗て乾かず
邇来新置妾	邇来 新たに妾を置き
心意日相怜	心意 日に ^{あわれ} 相怜む
貯之以金屋	之を貯うるに金屋を以てし
食之以玉餐	之に ^は 食ましむるに玉餐を以てす
阿母在堂上	阿母 堂上に在り
永夜不堪寒	永夜 寒さに堪えず
人面獸心輩	人面獸心の輩
何其運意偏	何ぞ其れ意を ^{めぐ} 運らすこと ^{かたよ} 偏る ⁴

この詩は五言排律という近代漢詩の形を採っている。この一句目に「痴漢」という語が見える。この詩は自分（良寛）が見た「一痴漢」のことを詠んだものだ。この詩が詠まれたのは19世紀前後のことであり、その頃にはすでに「白話小説」の影響によって「痴漢」という言葉が他のジャンルでも使われ始めていた。ただし、良寛の他の漢詩には、「痴」や「鈍」、「愚」といった語が多く使用されているのも確かであり、詩の内容は宗教的な色彩が濃いのもまた事実である。また入矢義高によると、一句目の『「我れ・・・の人を見るに』という句で始まる俗人や俗僧などに対する批判や罵りの作は寒山の詩でも特徴のある一類をなす」という⁵。即断はできないものの、以上のような事実を勘案した場合、この良寛の漢詩は、彼の宗教経験や思想に基づくものである可能性も決して小さくないと言えよう。ただ、ここではこれ以上の考察は行わず、指摘だけにとどめておく。

ところで、黄檗宗関係資料には「痴漢」という言葉が見えない。黄檗宗は日本三禅宗の一つであるとされ、もとは臨済禅の法灯を継承するものであるが、黄檗

宗関係資料には「痴漢」という文字は見出せない。この理由に関しては、後に改めて考えたいと思うので、今はひとまず置いておく。

三つめに、用例のすべてが会話中の文言であることである。これは先の論文でも指摘したことだが、今回の調査においてもそれが確認できた。またすべての用例が「愚かな男」という意味であることも再確認した。当然のことと言えるかもしれないが、「痴漢」とは男性が男性に向かって発する言葉であり、現在のように女性が男性に向かって発する言葉ではなかったと思われる。もちろん生活レベルでは女性が男性に向かって「愚かな男」という意味で発することはあったかもしれないが、少なくとも用例にそうした例は見当たらない。以上のことから、「痴漢」は口語であり、「愚かな男」を強く批難する際に用いられる罵倒語であったことが再確認できた。

ただし、禅宗以外の宗派にこの言葉が見られないことから判断すると、「痴漢」という語は禅宗において、ある程度特別な意味を持っていたのではないかということも想像される。というのも、密教系や浄土教系など他の宗教でも、人を批難する場面があるが、その際に「痴漢」にもっとも近い言葉は「痴人」であるからだ。「痴人」は宗派の別を問わず用いられる言葉であり、書き言葉でもあった。よく知られるように仏教には「三毒」（「三惑」）という考え方があり、修行や悟りを妨げる三つの煩惱のことである。「三毒」とは「貪（必要以上に求める心）」、「瞋（怒りや憎しみ、恨みなど）」、「痴（真理に対する無知）」を言うが、この中の「痴」が語られる際、仏典では通常「痴人」を用いる。

だが、先にも述べたように禅宗では「痴漢」を用いるのである。「痴漢」には「痴人」よりも強く罵倒するような意味合いと語感があったのかもしれない。表1に示した用例においても、人を強烈に罵倒していることがわかる。「痴人」が広く「愚か者」をさすのに対し、「痴漢」はある特定の人を激しく罵る語で、「馬鹿者！」という鋭く強い言葉なのであろう。場合によっては、その人物の考えや存在を全否定してしまうくらいの強さを持った言葉だったのかもしれない。

第2章：「千尺井中」の影響

本章では、表1には複数回、同じ文言が登場する。それは「千尺井中」という有名な公案で、資料1、8、13、16に見られる文言である。この内、影響力が大きかったものとして考えられるのは、資料1と8である。資料1は先に紹介したように、現在も中国で重要視される経典であった。それだけではなく、この書物は後の南宋時代、1252年に『五灯会元』として再編纂されている。またこの書の記述を伝承するものもあれば、批判したり、注釈をつけたりする書物も多数世に出た。

他方、日本での影響力だけを考えると、資料8が非常に重要であったことは容易に想像がつく。というのも『仏果園悟禪師碧巖録』（以下、『碧巖録』とする）は、「古来、『碧巖録』は日本禅林では宗門第一の書として広く参究され、多くの末書・注解が存している」⁶と解説されているように、その影響力は計り知れない。

この二書に共通して見えるのが、「千尺井中」と呼ばれる公案である。それは次のようなものである。ある時、仰山慧寂が耽源という老師に「井戸に落ちた人を短い縄も使わずに助けるにはどうすればいいのですか」と尋ねた。それに対し、耽源は即座に答える。そこで放たれるのが「咄、痴漢、誰か井中にある」という言葉だった。意味は「こら、馬鹿者、誰が井戸の中にいるのだ」というものである。悟ることのできなかつた仰山は、次に瀉山靈祐という老師のもとに行き、同じ問いを投げかける。すると瀉山は仰山の名である「慧寂」と叫ぶ。それに対して仰山は「はい」と答えたが、瀉山は「よし出た」と言う。これによって、仰山は悟ることができた。後に仰山は「耽源老師によって体を得ることができ、瀉山老師によって用を得た」と回顧したという。ちなみに、最後の部分は『景德伝灯録』など中国の経典では「耽源老師によって名を得て、瀉山老師によって地を得た」となっている点が異なっている。

この公案は仰山の語録や事跡が紹介されるたびに引かれたり、禪の公案書に引かれたりして、公案の中でもっとも有名なものの一つとなった⁷。日本ではやはり『碧巖録』に引かれたことが大きかった。

この公案によって「痴漢」という語も認知されるようになったと思われる。臨

済宗の流れを汲む黄檗宗に用例が見当たらないという事実は、『碧巖録』や、その中に載る「千尺井中」に対する考え方の差に起因するものなのかもしれない。

無論、この公案の影響力は禅林というきわめて限定された範囲であったかもしれない。だが、ともかくこの公案は、「痴漢」という語が存在し、それが「愚かな人」を意味する語だということを認知させるのに大きな役割を果たしたと思われる。後に「白話小説」によって本格的に「痴漢」という語が移入し、江戸中～後期になって定着することになるが、その基礎を作ったのは、まさしく本稿で紹介した禅宗関係資料類やその末書や注釈書であったのだ。

おわりに

最後に、本稿で明らかになったことをまとめておこう。

まず、11世紀に仰山慧寂の事跡が『景德伝灯録』に収載されて以降、「痴漢」という語が禅宗で用いられるようになった。日本に移入されたのは14C前後のことと思われる。とりわけ『碧巖録』が日本にもたらされ、重用されたことは、禅宗において「痴漢」という語が定着するのに大きな役割を果たした。その中に載る公案「千尺井中」は禅林で好まれて用いられた。こうした要因によって、禅宗という限定された範囲ではあったが、「痴漢」という語が認識された。これは後に中国の「白話小説」において「痴漢」が多用され、それが日本で広く使用されるための素地となったと考えられる。

本稿を含む「痴漢」に関する拙稿を用いて、現在までに明らかになった「痴漢」という語の展開図を示してみよう。

【中国】

7C 11C 14C 16-17C 20C

『北史』 『景德伝灯録』 『碧巖録』 「白話小説」

<愚かな男>



【日本】

<愚かな男>

「禅宗関係資料」 「黄表紙」

 「随筆類」

<女性にみだらな行為をする男>

「新聞・週刊誌・小説など」

図1：中国と日本における「痴漢」の展開と変容

まず 14C 頃禅宗関係資料によって中国から日本へ伝わった。その後、主に「白話小説」の影響によって日本で「痴漢」という語が広く知られるようになった。中国では話し言葉であった「痴漢」は、日本では主として書き言葉として受容され、定着した。というも、書物を通じて「痴漢」という語を受容したからだ。19C 末から新聞記事で「女性にみだらな行為をする男」を「痴漢」と呼ぶ例がしだいに増加してきた。1908 年に起こったいわゆる「出歯亀事件」は「痴漢」の意味を変える契機となった大事件だった。1920 年代以降はいわゆる「探偵小説」によって「女性にみだらな行為をする男」が「痴漢」する用例が増加する。第二次世界大戦後、1954 年に起こった「鏡子ちゃん」事件（少女殺人事件）は世の中を震撼させた大事件だったが、この事件以降、「痴漢」が「女性にみだらな行為をする男」以外の意味で使われることはほぼなくなった。

以上が、これまでに筆者が明らかにした「痴漢」の歴史である。

おそらく、「痴漢」のように同様の経路によって日本に流入し、定着した口語が他にもあったのだろう。今後は、そうした例も合わせて、日本における中国口語の移入経路と時期、そしてその後の日本での定着過程について考えてみたい。それによって、日本語、とりわけ漢語、とくに口語や俗語の日本への定着過程に新たな知見を与えることができると思う。筆者のような「痴漢（愚かな男）」は、日本語や日本文化研究に大きく寄与することはできない。ただ、この研究が少しでも今後の研究の役に立ったり、何らかの刺激を与えることになったりすることがあれば、筆者としてこれほど幸せなことはない。こうした願いが現実になるように祈りながら本稿を閉じたいと思う。

註

- 1 拙稿『『痴漢』の変容-中国から日本への伝播と定着』『日本語・日本文化』第41号（大阪大学日本語日本文化教育センター、2014年3月）、同『『痴漢』の文化史-『痴漢』から『チカン』へ』『日本研究』第49号（国際日本文化研究センター、2014年3月）。
- 2 鎌田茂雄ほか編『大蔵経全解説大事典』、雄山閣出版、1998年8月、p.614（鎌田茂雄執筆担当）。
- 3 同前、p.594（佐藤秀孝執筆担当）。
- 4 入矢義高訳注『良寛詩集（東洋文庫757）』、平凡社、2006年12月、p.204。
- 5 同前、p.205。
- 6 同前、p.595。
- 7 たとえばこの話は『教外別伝』や『大光明蔵』、『禅苑蒙求瑤林』、『指月録』、『五灯会元』、『五灯厳統』、『御選語録』、『禅宗正脉』、『聯灯会要』、『湖南通志』、『御定子史清華』などの諸書にも収載されている。

Zen and Chikan

Shigeki IWAI

This paper aims that we consider the word “Chikan” that appears in the documents in the Zen sects, and after adding this, reconsider the flow and timing of the vocabulary of “Chikan” and present a rough overall picture.

As a result of the analysis, since the 11th century the record of life of Gyozan Ejjaku was included in the book named as Keitou-Dentouroku, the word “Chikan” came to be used in the Zen sect. It is inferred that it was around 14th century that was transferred to Japan. In particular, the fact that “Hekiganroku” was brought to Japan and heavily used played a major role in establishing the word “Chikan” in the Japanese Zen sects. A question and answer listed in it, “Senjaku-seityu”, was a favorite used in the Zen sects. Through these factors, although it was in the limited range of the Zen sects, the word “Chikan” will be recognized. It is thought that this was later used “Chikan” in the novels written in the Chinese colloquial novels, which became the basis for being widely used in Japan.

<Keyword> Chikan, Zen, Keitou-Dentouroku, Hekiganroku, Koan